Andrea B. Rugh,

The Political Culture of Leadership in the United Arab Emirates.

New York : Palgrave Macmillan, 2007, xiii+269pp.

堀　抜　功　二

はじめに

本書は，アラブ首長国連邦（UAE）における部族的政治システムと，支配首長家による政治運営のための人的ネットワークの構築戦略について論じた一冊である。UAEは７つの首長国から構成されている連邦体制の国家であり，アブダビ，ドバイ，シャルジャ，アジュマーン，ウンム・アル=カイワイン，ラアス・アル=ハイマ，フジャイラの各首長国にはその地を支配する首長家（部族）が存在する。

UAEは他の湾岸アラブ諸国と同様に部族的な社会を基盤としており，政治や経済活動において人的ネットワークは極めて重要な役割を果たす。そのため，UAE政治を研究する上でも，首長家に関する情報が肝要となる。しかし，首長家の政治へのかかわり方に公私の別をつけることは難しく，公にならない情報も多い。したがって，いかに断片的に存在する情報を収集・整理し，全体像を再構成するかはひとつの要点となろう。

UAEの首長家や部族政治に関するこれまでの先行研究には，次のようなものが挙げられる。UAEの部族社会と政治の関係についてはHerad–Bey（2004），Lienhardt（2001），Van Der Meulen（1997）が議論しており，それに関連する近現代政治史についてはAbdullah（1978）などが詳しい。首長家に関する史料集としては，イギリスのArchive Editionsからの Rush（1991）が出版されており，本書も大きく依拠している。また，アラビア語文献にはal–Ṣāygh（2000），al–Muḥarramī（2005）などがあり，とくに後者からは首長家や主要部族の系譜を知ることができる。これまでの研究の多くは，概して歴史や政治史に関する記述的な研究であり，婚姻や人的ネットワークの戦略的形成を中心にUAE政治の分析を試みた本書の切り口は，新しいものと言えるだろう。

著者のアンドレア・ルーは，アメリカ・ワシントンD. C. の中東研究所の非常勤研究員であり，人類学で博士号（アメリカン大学）を取得している。これまでRugh（1984）など，中東社会における家族に関する研究を発表している。著者はUAEや湾岸政治を専門としないが，UAEへの長期滞在経験があり，また人類学的な視点から人間関係の構築と政治とのかかわりを論じようと試みた。

Ⅰ　各章の概要

本書は，以下のとおり序文および12章から構成されている。

序
第１章　経済的・政治的コンテクスト
第２章　文化的コンテクスト
第３章　アブダビ・初期のリーダーたち
第４章　ザーイド大首長とアブダビの統合
第５章　バニー・スルターンとアブダビの変容
第６章　マクトゥーム家（ブー・ファラーサ支族）とドバイの発展
第７章　初期カワースィム部族治下のシャルジャとラアス・アル=ハイマ
第８章　カワースィム部族治下におけるシャルジャとラアス・アル=ハイマの分裂
第９章　ブー・フライバーン家治下のアジュマーン首長国の独立維持戦略
第10章　ムアッラー家治下のウンム・アル・カイワイン首長国の生き残り戦略
第11章　シャルキィー家とフジャイラ独立の追求
第12章　リーダーシップの政治文化

各章には，そこで取り上げられる首長家の家系図

と支配地域の地図が掲載されており，巻末には部族名インデックスが付されている。はじめに，序文において本書の概要が説明されている。著者の問題関心は，UAEにおいて政治的な関係性がいかに機能するかを知ることにある。そのために，地元の政治文化の枠組みのなかで，首長と首長家・部族内外における人的ネットワークの形成を歴史的に明らかにし，現実の政治への影響の実証を試みる。ここでは，政治文化を「共有された価値観，規範，期待，アプローチ，慣習から構成され，それらが政治的実践を形成し，類似の視点をもつ他者とのコミュニケーションを可能にするもの」と定義した。

第１章および第２章では，本書の中心概念となる指導者たちの政治文化について問いを示し，分析枠組みを提示している。まず，本書の意義をUAEにおける首長（部族長）の役割と，彼らの世界観がその地域の要素と交差して，いかに政治的課題を形成したのかを論じることと位置付けた。そして，全体についての４つの問いを明らかにした。第１にUAEのような部族社会におけるリーダーシップの政治文化とは何か，第２に個人統治の形態を変容させた外部要因は何か，第３に類似の政治文化は現存するのか，もしあるとすれば，どのように発現しているのか，そして第４に指導者たちはいかに早く休戦諸国（現在のUAE）における新しい状況に対応したのか，である。

第１章では，1971年の独立に至るまでの伝統社会の変容を，経済的・政治的文脈に沿って論じている。19世紀からイギリスによる政治的・軍事的介入が始まって以来，休戦諸国の伝統的な政治構造は大きく変容した。すなわち，イギリスが各地の首長を個別に承認する分断政策を実施したことにより，地域政治における首長の特権的役割が強化された。また，天然資源の所有権との関係で首長国間の領域線が引かれ，それまで地域において可変的・流動的であった諸部族は地域に固定化されたのである。第２章では，いかに文化的期待が指導者の視点を形成し，その際に用いる戦略を定義するのか，を問いに議論を進めた。そこでは，本書の分析枠組みとしてアラブ社会における人間関係を３つの形態，すなわち部族モデル，家族モデル，外部者モデルとして類型化した。部族長と他者との人間関係を，部族モデルでは平等的・水平的関係，家族モデルではヒエラルキー的な垂直関係，外部者モデルでは一時的でフレキシブルな関係と見なした。ここで重要になるのは，イブン・ハルドゥーンが述べるところの社会におけるアサビーヤ（社会的連帯）の生成であり，さらに婚姻というオプションを通じて，部族長は親族・非親族を自らの人間関係に取り込んでいくのである。

第３～５章においては，UAE最大の首長国であるアブダビの基盤を築いたバニー・ヤース部族と現在の首長家であるナヒヤーン家について，歴史的な部族長の座をめぐる争いの観点から整理している。アブダビ首長は，伝統的にバニー・ヤース部族のブー・ファラーフ支族にあるナヒヤーン家から選出されるようになった。それは，一度首長位を確立すると，現職の近親者が資源とプレステージを保持することができ，そのため将来的な指導者の座を維持しやすくなったからである。19世紀中頃からザーイド大首長による治世が始まると，半世紀にわたってアブダビの政情は安定した。ひとつの要因は，婚姻が戦略的機能を果たし，複婚によって息子が多く生まれ，首長の権力基盤が強化されたことである。しかし，この状況は母親ブロックに基づく息子たちの政治的競争を生み出した。すなわち，婚姻戦略は部族政治の基盤となる一方で，別の紛争の種を内在化させるのであった。

そして，現在のアブダビ首長国の基盤は1966年にザーイド・ビン・スルターンが新首長の座についたことによって築かれた。ザーイド首長はアブダビの近代化において親族を動員した。また，延べ９回にわたる結婚から19人の息子をもうけている。連邦政治においてザーイド首長が大統領として33年にわたる長期政権の維持を可能にしたのも，優れたバランス感覚に基づく部族，家族，外部者モデルの戦略的な採用によるものであった。親族や息子たちを連邦・首長国の要職に配して部族・家族間の紐帯を強めるとともに，外部から教育を受けた優秀な人材を登用したのである。

第６章では，ドバイのマクトゥーム家について経

済活動を重視した部族政治の観点から議論した。1833年にアブダビのバニー・ヤース部族から分裂したブー・ファラーサ支族は，ドバイに移住し，その地を治めるようになった。その後，天然の良港をいかして貿易港としての発展を遂げていくことになる。対外関係・経済を重視する政策のなかで，またアブダビのバニー・ヤース部族とシャルジャのカワースィム部族という大勢力の間に位置するドバイは，同盟に基づいた他部族の動員よりも，地域の安定化に力を注いだのである。ドバイにおける婚姻戦略をみると，アブダビと同様に重要性が高かったと言える。特徴的な点としては，姻戚関係を通じた他首長家との関係強化や，また首長が自らの寛容さを示すために自分の娘をライバルに嫁がせることなどがあった。さらに，首長の妻は国外の王室からも迎え入れられている。最近の例としては，現在ドバイ首長の座にあるムハンマド・ビン・ラーシドがあり，イランやアルジェリア出身の妻がいる。2004年には，ヨルダンのフサイン国王の娘ハヤを娶った。ドバイ首長の妻は伝統的に政治的影響力を行使しており，ハヤも他の妻と比較して公的な場面に立つ機会が多く，今後の動向が注目される。

第７章および第８章では，シャルジャとラアス・アル=ハイマという２つ首長国を治めるカワースィム部族（カースィミー家）について検証している。北部首長国一帯の一大勢力であったカワースィム部族は，19世紀にイギリスから「海賊」と非難されて攻撃を受けた。カワースィム部族はナヒヤーン家と同様，同盟や婚姻を通じた家族，部族，外部者との関係を強化したが，ナヒヤーン家ほどは他の部族と協調的な関係ではなかった。両首長国とその周辺地域は，第11代部族長のスルターン・サクルの統治以降に分裂するようになり，1921年頃には完全に分離したとされている。このようにカワースィム部族がアブダビのように首長国を統一できなかった理由は，両首長国が地理的に離れており，他の有力部族の支配を退けられなかったからである。つまり，ナヒヤーン家がバニー・ヤース部族と結んできたような協調的な部族連合体として勢力を維持できなかったと言える。また，独立後も首長家内部での母親・兄弟の権力ブロックの亀裂に沿った権力闘争が頻発した点は，部族・家族モデルの理論と現実の相違を示している。

第９章では，UAEのなかで最小のアジュマーン首長国について，小国の生き残り戦略の視点から議論している。アジュマーン首長家は代々ヌアイーム部族のブー・フライバーン家によって継承されている。アジュマーンやウンム・アル=カイワイン首長国は，ドバイと同様にカワースィム部族やバニー・ヤース部族などの大勢力に挟まれており，生き残りは死活問題であった。このような状況下で，アジュマーンは内陸地に勢力を誇るヌアイーム部族と連携することにより，自らの立場を維持することに成功した。さらに，グライル家といった有力商家との婚姻を通じ，経済基盤の確保にも努めたのである。

第10章では，アジュマーンと同様に小首長国であるウンム・アル=カイワイン首長国と，同地を治めてきたアリー家（部族）を検討している。アリー家のなかで首長位を継承している系統は，ムアッラー家である。もともと内陸地のオアシスを支配していた有力部族であった。重要な婚姻戦略としては，地域の一大勢力であったカワースィム部族との婚姻と，隣国で同じく小国であるアジュマーンとの婚姻を通じた自首長国の安定策である。ところが，こうした小首長国では首長家男性が他の首長家の女性と結婚するため，逆に未婚の首長家女性の数が増えてしまい，その女性の結婚相手の選定が困難となる，という新しい問題も生まれた。本書では，ムアッラー家が他の首長家と比べて一時を除いて平和的に継承を行うことができた理由として４点が指摘された。すなわち，第１に地域政治においてあまり重要性をもたなかったこと，第２に均質的な住民（部族構成），第３に歴史的に資源をもたなかったこと，第４に外部からの脅威が内的な結束を強めたこと，である。

第11章では，UAEの首長家としては比較的新しいフジャイラ首長国とシャルキィー部族の独立をめぐる戦略を分析している。フジャイラ首長国はUAEの東部に位置し，天然資源には恵まれないものの，ホルムズ海峡を経ずにオマーン湾に出ることのできる唯一の首長国であり，近年ではその地勢的重要性

が注目されている。また，同地を支配するシャルキィー部族は，休戦海岸においてはバニー・ヤースに次ぐ大部族であった。ところが，シャルキー部族がイギリスから首長家として認識されたのは20世紀に入ってからのことである。それまで，東部海岸地方は，カワースィム部族，オマーン，ワッハーブ主義者，そして地元のシャルキィー部族などが争う場であった。しかし，シャルキー部族は19世紀後半からシャルジャからの独立を主張しはじめ，カワースィム部族と反目する対抗部族を動員して対抗した。さらに，イギリスをこうした争いに介入させることにも成功したのである。そして，1952年３月にイギリスはフジャイラを７番目の休戦海岸首長国として，その地位を承認した。

最後の第12章では，これまでの本書の議論を総括している。19世紀から20世紀にかけて，部族的な統治は平等的なものから中央集権的なものへと変化した。とりわけ，イギリスの政治的関与，部族の定住化，石油の発見が首長による個人支配へと変えたと指摘する。部族長の政治活動は人間関係の採用活動と見なすことができ，その基盤となるアサビーヤは部族・家族モデルという２つの人間関係モデルを通じて形成される。そこでつくられた義務関係を境界線として内と外が分けられる。これが，UAEのような部族社会のもつ政治文化であると説明する。ところが，現実は理論よりも複雑であり，個人支配を実践するためには強い紐帯で結ばれているはずの家族・親族の内部からも首長位に対する挑戦が起こる。そこで，第３のオプションとして部外者を戦略的に採用するのであった。最後に，首長家における婚姻は個人的な領域ではなく，常に政治的動機と結びついていると断定した。換言すれば，婚姻は首長の政治的認識を示す公的な指標であると言えよう。

Ⅱ　評価と疑問点

本書の読了後にUAEの建国史を振り返ると，連邦体制における政治統合の困難さを容易に想像することができる。各首長国において複雑に入り組んだ部族・姻族ネットワークが存在し，それらは首長国の領域を超えた人間関係としても機能する。また，各首長家・部族ごとに歴史をもち，それらを乗り越えて国家統合を果たそうとしたのは，ひとつの大きな実験だったと言えるのではないだろうか。

本書を評価する１点目は，19世紀から現在に至る各首長家・有力部族の政治史を描き，そのなかで構築されてきた人間関係と政治変容を史資料に基づいて解釈したことである。冒頭でも指摘したように，首長家の情報へのアクセスには制約があり，その全体像を知ることは容易ではない。しかしながら，著者は細切れの情報や史資料，インタビューなどから丹念に人間関係の再構成を試みた。人類学者的な視点からUAE政治の分析を試みた労作であると言える。

２点目は，婚姻を軸に人間関係の成り立ちや政治的動機の分析を進め，婚姻の政治的役割を指摘したことである。他首長家との関係において，首長自らやその子どもの婚姻を政治的に用いることは，親族内結婚が優位な部族社会においてはひとつの特徴的な出来事である。このような状況は，とりわけUAEにおける伝統的な政治，社会，経済構造の急激な変容に対する，各首長家の生き残り戦略として捉えることができる。

最後に，本書の内容に関する疑問を２つ指摘したい。第１に，本書の分析枠組みについてである。提示された部族，家族，外部者モデルは「アラブ社会の人間関係」を所与のものとして類型化しており，アラビア半島やUAEにおける部族社会の特殊性，イスラーム的な要素とのかかわりについては，あまり議論がなされていない。また，書名は「リーダーシップの政治文化」となっているが，結局それはUAEにおいて，いかなるものであったかという明確な答えは出されていない。「政治文化」を単なる「文化」と同義で捉えるため，必ずしも政治学的な枠組みとして議論が進められておらず，これは本書の限界でもあると言えよう。

第２に，新世代への対応の問題である。たとえば第５章のアブダビ首長国の議論において，ザーイド大統領の息子で記述があるのは，現大統領のハリーファや同じく現アブダビ皇太子のムハンマドのほか，

一部の要職に就任している者までである。しかし，ハリーファ大統領はすでに60歳を迎えており，その息子たちの動向も注視する必要がある。また，2008年にはドバイ首長国においてムハンマド・ビン・ラーシドの息子たちが，次々に要職へ任命された。このような世代交代の動きは，1990年代半ばから現在にかけて，各首長国で行われており，欲を言えば，そのようなデータを盛り込んでほしかった。本書が出版された後，Kéchichian（2008）が出版され，これには各首長家における次世代の主要人物データも盛り込まれている。本書と合わせて，該当するUAEの章を一読されたい。

むろん，以上の批判点を差し引いても，本書はUAE研究に対して新しい視点を提示することに成功したと言える。今後，本書をもとにUAEの政治研究がさらに実証的に発展することが期待される。

文献リスト

Abdullah, Muhammad Morsy 1978. *The United Arab Emirates : A Modern History*. London : Croom Helm.

Heard-Bey, Frauke 2004. *From Trucial States to United Arab Emirates : A Society in Transition*. Dubai : Motivate Publishing.

Kéchichian, Joseph A. 2008. *Power and Succession in Arab Monarchies : A Reference Guide*. Boulder : Lynne Rienner Publishers.

Lienhardt, Peter 2001. *Shaikhdoms of Eastern Arabia*. ed. Ahmed al-Shahi. Oxford : Palgrave.

al-Muḥarramī, Ḥāmid bin Muslim bin Bakhīt 2005. *al-Shamā'il fī Ansāb al-Qabā'il*［部族的系譜の性格］. Damascus : Maktaba al-Asad.

Rugh, Andrea B. 1984. *Family in Contemporary Egypt*. Syracuse, N.Y. : Syracuse University Press.

Rush, Alan de Lacy ed. 1991. *United Arab Emirates* Vol. 1 and 2. Ruling Families of Arabia (12 Vols.). Slough : Archive Editions.

al-Ṣāygh, Fātima 2000. *al-Imārāt al-'Arabīya al-Muttaḥida: min al-Qabīla ilā al-Dawla*［アラブ首長国連邦：部族から国家へ］. al-Ain : Dār al-Kitāb al-Jāmi'i.

Van Der Meulen, H. 1997. "The Role of Tribal and Kinship Ties in the Politics of the United Arab Emirates." Unpublished Ph.D. Thesis, Fletcher School of Law and Diplomacy.

（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程・日本学術振興会特別研究員）